

小学校音楽の教科書教材における 音楽と道德の関連についての一考察

山 崎 浩 隆*

A Study on the Relation of Music and Morals in Elementary School Music Department Textbooks

Hiroataka YAMASAKI

1. はじめに

明治5年に学制が発布され、「当分コレヲ欠く」としながらも後に「小学唱歌集」が出版され、本格的な唱歌教育が始まった。そのときの目標は「徳性の涵養」である。この目標の下、修身の内容を替え歌にして歌わせたりすることで、その教化を図ったのである。

もちろん、教材曲としては修身を歌うだけではない。それぞれの曲は、文部省や音楽取調掛が議論の末につくり選択して完成させている。では、現在はどうかだろう。現在、音楽科の目標は学習指導要領で示されており、「豊かな情操を育む」ことである。明治期は、「徳性」であったものが、現在では「情操」とことばを変えその方向性も異なるが、芸術性のみを目標としているのではなく、心情的側面を含めて目標にしていることは一貫しているところである。

さて、平成20年に学習指導要領が改訂された。試案も含めて戦後8回目となる。ここでは、道德と教科の関連について、それまでのように総則で述べられるに止まらず各教科の指導計画作成に当たったの配慮事項の中にも述べられており、前回までと比べると一歩踏み込んだものとなっている。

指導要領の改訂にあわせて各教科の教科書も改訂された。ここでは、音楽の教科書に掲載された曲の数とその内容に道德との関連がどのように反映されているのか、平成17年に発行された前回の教科書と今年度の教科書を比較し、教科書の教材における音楽と道德との関連を考察する。さらに、明治期の「徳性の涵養」を目標とした唱歌の内容と比較し、音楽と道德との関連を考察する。

2. 先行研究と研究の目的

明治期の唱歌の多くが修身の内容を取扱っていることは多くの研究が指摘している¹⁾。しかし、現在の音楽科教育と道德との関連についての研究は少ない。

日吉(2010)は、指導要領における音楽と道德の目標を比較し、音楽科の授業での道德の目標に即した実践の可能性を探っている。その中で、教材曲の歌詞についてふれており、小学校6年生における教材「語り合おう」の実践例を提示しているが、教科書に掲載された曲全体についての考察はされていない²⁾。

木間(2008)は、学校教育における音楽教育が情操教育として位置づけられてきたことの理論的な研究を行っている。その中で情操教育としての音楽教育の役割として「もし音楽教育にできることがあるとするならば、それは、個を超えて『われわれの共感』を目指すことではないだろうか³⁾。」と述べ、現代社会の問題を象徴する「孤立する人間」「社会の空洞化」に対する音楽教育の意義に言及している。木間が指摘するように学校における音楽科学習では集団での学習指導が中心であり、身体を通して同じ曲を表現する音楽活動では「共感」する機会が多くなる。それは、音楽活動がもつ集団性がそもそも内包している機能である。つまり、音楽活動そのものが道德と関連しているのである。

しかし、明治期の唱歌教材が歌詞に教化すべき内容を盛り込み思想を植え付けていったように、教材曲の歌詞の果たす役割は大きなものである。したがって、本稿では教材曲として使われる教科書の教材曲の数と内容から音楽と道德との関連を検討することを目的とする。

* 教育学部音楽科

3. 指導要領における道德と音楽科との関連

指導要領によると「教科の目標では美的情操を養うことを中心にはするものの、学校教育の目標が、豊かな人間性の育成を目指すものであるところから、ここでは、豊かな情操を養うことを示している⁴⁾」ことから、音楽科の目標における情操が美的情操に限らないことを示している。また、総則の中で「学校における道德教育は、道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う」と明記してある。さらに、教科の指導計画作成上の配慮事項の中でも「音楽科の特質に応じて適切な指導をすること」とあり、これは全教科に共通して記してある。この全教科に配慮事項として道德の指導が明記されたのは、前回平成10年指導要領までにはなかったことである。このことから、今日の道德的課題がこれまでのような取り組み方だけではその解消が望めない状況になっていると考えることができよう。それほど課題が社会を取り巻き、前回以上に各教科において踏み込んだ指導が求められているのである。

4. 道德の今日的課題

それほどまでに大きな今日的な課題とはいったいどのようなものであろうか。それを確かめるために、文部科学白書における生徒指導上の諸問題を取り上げる。

平成21年度文部科学白書によると、「いじめの社会問題化や少年による重大事件の続発、小・中学校における暴力行為の発生件数の増加など、児童生徒の問題行動は教育上の大きな課題」であることが述べられている⁵⁾。

特に、「平成21年度の調査結果では、暴力行為の発生件数は約6万1千件であり、小・中学校においては過去最高の件数に上る（中略）いじめの認知件数は約7万3千件と、前年度より減少しているものの依然として相当数に上って」いる。この問題に対処するため白書では学校に対して「教師と児童生徒との信頼関係を築き、全ての教育活動を通じて規範意識や社会性をはぐくむきめ細かな指導」を求めている。

このように、現在「いじめ」と「暴力行為」の2つの問題が生徒指導の大きな課題としてある。これらの問題に音楽科はどう対応しようとしているのだろうか。そして、教科書の教材曲においてそれをどのように反映しようとしているのだろうか。指導要領解説には「音楽科で扱った内容や教材の中で適切なものを、道德の時間に活用することが効果的な場

合もある⁶⁾」とあることから、教科書教材においても音楽と道德との関連を意図した編集が行われているのではないかと、そして今日の課題にどのような教材で対処しようとしているのか考察していく。

5. 教科書教材の分類

現行の小学校学習指導要領での道德の内容は、以下の4つである。

- ①主として自分自身に関すること
- ②主として他の人とのかかわりに関すること
- ③主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること
- ④主として集団や社会とのかかわりに関すること

これら4つの基準で、熊本県内で採択されている教育出版と教育芸術社に掲載されている歌唱教材の歌詞を分類、比較した。

分類は次のような手順で行った。

- 1 教科書教材の歌詞を分類の対象とする。
- 2 自然や動物の様子を表すものは、道德の内容の③「自然や崇高なものとのかかわり」とする。ただし、名前が登場するのみ等、様子を表していないものはその対象としない。
- 3 自然や動物を比喻として用いてあるものは、それらに例えてあるものを分類の対象とする。
- 4 外国語のみの歌詞は対象としない。
- 5 音楽の用語を指導するためだけの歌詞は対象としない。

以上の手順で分類したものが表1、2、3、4である。表1、2は曲数の増減を、表3、4は合計曲数に対する内容ごとの曲数の割合を示している。

6. 教科書における歌唱教材の分類と比較

これらの表を見ると、今回の改訂による大きな変化として比較した割合が10%を越えるものを見ると、教育出版の2年生で道德の内容③と教育芸術社の4年生、道德の内容②と5年生の内容③が該当する。教育出版の2年生では割合は11.5%、曲数としては3曲増えている。教育芸術社の4年生では割合は14.2%、曲数は4曲減っている。

同じく教育芸術社の5年生では割合は11.2%、曲数は3曲減っている。

全学年の内容ごとの合計を見ると、2社の違いが明確に分かる。教育出版は、自然や崇高なものとのかかわりに関する歌詞の曲をより多く加えているのに対し、教育芸術社は「自分自身に関すること」と「集団や社会とのかかわりに関すること」が多く加

表1 道徳の内容に基づく歌唱教材数の比較 教育出版

学年	出版年	①	②	③	④	合計曲数
		自分自身	他の人	自然や崇高	集団や社会	
1年生	H17	3	8	9	6	26
	H23	2	8	11	5	26
	差	-1		2	-1	
2年生	H17	3	4	15	4	26
	H23	2	2	18	4	26
	差	-1	-2	3		
3年生	H17	4	1	14	3	22
	H23	4	2	12	3	21
	差		1	-2		-1
4年生	H17	4	1	12	6	23
	H23	3	2	15	5	25
	差	-1	1	3	-1	2
5年生	H17	2	3	11	9	25
	H23	2	4	11	9	26
	差		1			1
6年生	H17	5	2	8	6	21
	H23	6	3	8	7	24
	差	1	1		1	3
全学年の増減		-2	2	6	-1	5

表3 道徳の内容に基づく歌唱教材の割合(%)の比較 教育出版

学年	出版年	①	②	③	④
		自分自身	他の人	自然や崇高	集団や社会
1年生	H17	11.5	30.8	34.6	23.1
	H23	7.7	30.8	42.3	19.2
	差	-3.8	0	7.7	-3.8
2年生	H17	11.5	15.4	57.7	15.4
	H23	7.7	7.7	69.2	15.4
	差	-3.8	-7.7	11.5	0
3年生	H17	18.2	4.5	63.6	13.6
	H23	19.0	9.5	57.1	14.3
	差	0.9	5.0	-6.5	0.6
4年生	H17	17.4	4.3	52.2	26.1
	H23	12.0	8.0	60.0	20.0
	差	-5.4	3.7	7.8	-6.1
5年生	H17	8.0	12.0	44.0	36.0
	H23	7.7	15.4	42.3	34.6
	差	-0.3	3.4	-1.7	-1.4
6年生	H17	23.8	9.5	38.1	28.6
	H23	25.0	12.5	33.3	29.2
	差	1.2	3.0	-4.8	0.6

表2 道徳の内容に基づく歌唱教材数の比較 教育芸術社

学年	出版年	①	②	③	④	合計曲数
		自分自身	他の人	自然や崇高	集団や社会	
1年生	H17	1	2	14	5	22
	H23	2	3	17	9	31
	差	1	1	3	4	9
2年生	H17	2	4	14	3	23
	H23	3	3	18	5	29
	差	1	-1	4	2	6
3年生	H17	4	3	14	5	26
	H23	6	2	12	4	24
	差	2	-1	-2	-1	-2
4年生	H17	2	6	15	4	27
	H23	4	2	14	5	25
	差	2	-4	-1	1	-2
5年生	H17	2	3	8	12	25
	H23	3	5	5	11	24
	差	1	2	-3	-1	-1
6年生	H17	8	4	9	3	24
	H23	8	5	9	3	25
	差		1			1
全学年の増減		7	-2	1	5	11

表4 道徳の内容に基づく歌唱教材の割合(%)の比較 教育芸術社

学年	出版年	①	②	③	④
		自分自身	他の人	自然や崇高	集団や社会
1年生	H17	4.5	9.1	63.6	22.7
	H23	6.5	9.7	54.8	29.0
	差	1.9	0.6	-8.8	6.3
2年生	H17	8.7	17.4	60.9	13.0
	H23	10.3	10.3	62.1	17.2
	差	1.6	-7.0	1.2	4.2
3年生	H17	15.4	11.5	53.8	19.2
	H23	25.0	8.3	50.0	16.7
	差	9.6	-3.2	-3.8	-2.6
4年生	H17	7.4	22.2	55.6	14.8
	H23	16.0	8.0	56.0	20.0
	差	8.6	-14.2	0.4	5.2
5年生	H17	8.0	12.0	32.0	48.0
	H23	12.5	20.8	20.8	45.8
	差	4.5	8.8	-11.2	-2.2
6年生	H17	33.3	16.7	37.5	12.5
	H23	32.0	20.0	36.0	12.0
	差	-1.3	3.3	-1.5	-0.5

えられている。

加除された曲を学年ごとに見ると、最も多いものは教育芸術社の1年生の内容④「集団や社会とのかかわりに関すること」と2年生の内容③「自然や崇高なものとのかかわりに関すること」がそれぞれ4曲増えており、同じ教育芸術社の4年生の内容②「他の人とのかかわりに関すること」が4曲減っていることである。

生徒指導上の課題である信頼関係の構築、そして規範意識の育成の点から見ると、「集団や社会とのかかわりに関すること」に関する曲が増えるのは分かるが、「他の人とのかかわりに関すること」が4曲減ることは、課題の解消とは逆行していることができる。

7. 教科書から加除された曲

(1)加えられた曲

新たに加えられた曲が多い教育芸術社1年生の教材曲を見ると、平成17年版に掲載された曲はそのまま残り、新たに「めだかのがっこう」「ゆびあそびのうた」「こいのぼり」「ちきゅうはひろば」が加えられている。「めだかのがっこう」の中には「だれがせいとかせんせいか」という歌詞があるように、教師と子どもとの信頼関係の表現だと受け取ることができている部分がある。

「ゆびあそびのうた」は、それぞれの指を家族の一人一人に例え、指先を合わせる動作をしながら家族がなかよくしている様子を描いている。

「こいのぼり」は、こいのぼりを家族に例え、仲良くしている様子が描かれている。

「ちきゅうはひろば」は、地球の子どもたちが手をつなぎ、明るい声で夢を歌うことが呼びかけられている。

このように、理想の姿を描いた内容が直接的に提示されている。教師との関係、家族や社会の理想像を具体的に提示し、それらを印象づけるものが加えられているのである。

2年生の内容③では、平成17年版の「木のはのゆうびん」が削除され、「どこかで」「はるのまきば」「海とおひさま」「アイアイ」「あの青い空のように」が加えられている。「木のはのゆうびん」も「海とおひさま」も自然の情景を描いた歌詞であるが、後者の方がより具体的で海やおひさまを自分自身や友達に置き換えて考えやすくなっている。自然の様子を描きながら道德の内容とも関連できるような歌詞である。

教育出版で最も多く加えられたのは、4年生の内容③「自然や崇高なもの」に該当するものである。具体的に見ると、「飛べよツバメ」「メリーさんのひつじ」「川はよんでいる」「こぎつねの歌」の4曲である。この中で、「飛べよツバメ」以外の3曲は、動物や自然の様子を描いた歌詞であり、旋律やリズムの表現の仕方を学習するための曲として掲載されている。「飛べよツバメ」は、お互いの声を聴き合うことが学習の目標とされている。歌詞の内容は、子ツバメが互いに追いかけ合い自由に楽しく飛んでほしいという願いを込めたものである。動物であるツバメを大切にしようと読み取ることもできるし、子ツバメという設定から、小さい子どもにやさしくしようと読み取ることもできる。また、互いに関わり合うことの大切さやツバメを自分自身に置き換えて自由に楽しく生きていこうという思いをもつよう

に読むこともできる。道德の複数の内容を含んだ歌詞となっている。教育出版では他にも1年生に新たに加えられた曲に「どんなゆめ」がある。これは3番まであり、それぞれ動物たちが光のはらっぱ、緑のはらっぱ、生まれた国の夢をみることが描かれている。自然そして社会とのつながりが明確に意図されており、これも複数の道德の内容が盛り込まれている。

(2)削除された曲

最も多く削除されたのは、教育芸術社の4年生の内容②に関わるものであり、「あたらしいえがお」「歌よびひけ」「グッデーグッバイ」「おどろう楽しいポーレチケ」の4曲が削除され、「レッツ・ダンス」が新たに加えられている。

「あたらしいえがお」は発声を意図した曲であり、この内容は平成23年版に新たに加わった「ゆかいに歩けば」に移行している。ただし、この「ゆかいに歩けば」は道德の内容では①に該当する。

「おどろう楽しいポーレチケ」は部分2部合唱の曲であり、これは「レッツ・ダンス」に移行している。「ゆかいに歩けば」は「あたらしいえがお」に比べてスタッカートが多く、発声を指導する上で効果的である。また、「レッツ・ダンス」は、教科書の中で「2人組になって歌ったりして練習する」といいよ。」という子ども向けの記述があり、友達とかかわりながら練習したり表現することができるようになっている。

「歌よびひけ」「グッデーグッバイ」の2曲は削除されているが、これらについても内容が差し替えられたと考えられる曲がある。内容①に該当する「いつだって!」という曲である。この曲は3つの部分からできており、第1に前の友達とのかかわりを描き、第2に地球での出会いを、第3にくじけずに歩き続ける自分を描いている。つまり、最後の部分が内容①に該当するので分類では①としたのだが、内容②にも④にも該当する。これは、先に見た「飛べよツバメ」のように、1曲の歌詞の中で複数の道德の内容が含まれているからである。このような曲は、他にもある。教育芸術社では、3年生の「とどけようこのゆめを」5年生の「だれかが口笛ふいた」「僕にできること」「南風によって」6年生の「広い空の下で」これに先の「いつだって!」の合計7曲。このうち、平成23年版に加わったのが、4曲である。教育出版では、1年生の「どれみのキャンディー」5年生の「ハローシャイニングブルー」「星とたんぼぼ」6年生の「明日を信じて」「U&I」「未来への賛歌」これに先の「飛べよツバメ」の合計7曲。こ

のうち、新たに加わったのが、3曲である。

8. 「小学唱歌」における教材曲との比較

明治期における唱歌は、自然に関するものも多いが、五常の歌、五倫の歌に代表されるような修身の内容が歌詞になっているものも多い。

五常の歌⁷⁾

- 一 野辺のくさ木も、雨露の。
めぐみにそだつ、さまみれば。
仁てふものは、よのなかの。
ひとのこゝろの、命なり。
- 二 飛驒の工(たくみ)が、うつ墨に。
曲(まがり)もなほる、さまみれば。
義といふものは、世の中の。
人のこゝろの、條理(すぢめ)なり。
- 三 威像(よそほひ)ほかに、あらはれて。
謹慎(つゝしみ)みてる、さまみれば。
禮てふものは、世の中の。
ひとのこゝろの、掟なり。
- 四 神の藏(かく)せる、秘事(ひめこと)も。
さとり得らるゝ、さまみれば。
智といふものは、世の中の。
人のこゝろの、寶なり。
- 五 月日と共に、あめつちの。
循環(めぐり)たがはぬ、さまみれば。
信てふものは、世の中の。
人のこゝろの、守りなり。

このような気持ちをもち行為をすべきだという理想像を示すという点では現在も同じである。しかしこの五常の歌のように表現が抽象的である点が現在と大きく異なる。また、戦前は、五倫の歌のように格言を子どもに覚えさせることを目的としたものもあるが⁸⁾、現在ではそのような目的の教材曲は見当たらない。

戦前の音楽教育や美術教育は「子どもの自主性や主体性をおさえ、あるいは無視して、『権威』によって規制の『徳目』をおしつけ、ある一定の型にはまった人格の形成を目指し、説話や訓話あるいは訓練や臨画、そして行進曲や軍歌による集団行動等を通して実践された、教師中心の天降りの教育作用であった⁹⁾」のである。

情操教育という観点からすると、明治期の「小学唱歌」と共通点もあるが、それ以上に相違点がある。

9. 考察

以上のように平成23年版で加除された教材曲を検討の対象として見てきた。その結果、以下のことが言えよう。

まず生徒指導上の課題との関連性を見ると、2社とも高学年で内容③「自然や崇高なもの」に該当する曲が減り、内容②「他の人とのかかわり」に該当する曲が増えている。これは先に見た生徒指導の課題と関連していると見ることができる。高学年という発達段階からすれば、内容②の曲を増やすというのは、課題解決を図る上で妥当だと言えよう。

さらに、歌詞の内容については、1曲の中に複数の道徳の内容を含んだものが増えている。これは、「小学唱歌」の五常の歌が複数の徳目を含んでいるのとは異なる。五常の歌では、1番、2番…と同じ旋律を繰り返し、その繰り返しの度に内容が変わっているのに対し、現行の平成23年版では、複数の内容を含むどの曲も1番の中でフレーズが変わると、歌詞の内容が変わるようになってきている。つまり、五常の歌は数え歌のように同じ旋律を繰り返し、刷り込もうとしているが、現行では「いつだって!」で見たように、複数の内容が一つのストーリーとして描かれている。ストーリーとして描かれることで、様子を思い浮かべたり、内容を自分に引きつけ自分自身をふり返ることができるようにつくりかたされているのである。押しつけではなく、子どもが思考・判断できるような歌詞の内容となっていることは、それを音楽表現に生かす上でも有効なものとなる。音楽の内容では平成20年学習指導要領に「子どもたちが思いや意図をもって表現できるようにする」ことが盛り込まれた。思いや意図を子どもたちがもつことと、自分自身をふり返り思考・判断することとは大きくかわるものである。思いや意図をもつことによって音楽表現がよりよいものになっていくと同時に、思いや意図をもつために自分や自分たちの思いや行為をふり返る必要が出てくる。つまり、このような教材によって、音楽教育は道徳と強くつながるのである。音楽教育は、芸術教育かそれとも徳目主義的な情操教育かという二律背反ではなく、教材曲とその用い方によってそれらを止揚することができるのである。

10. おわりに

本稿では、教科書教材に限定して道徳との関連を見てきた。しかし、音楽の授業では共通教材以外については、指導目標に合致するものであれば教科書

以外の教材を用いることも可能である。そこで、子どもたちがよく知りかつ道德の内容と合致するような曲を教材曲として活用すると、子どもたちの表現意欲を高め、その歌詞から自分や自分たちを振り返りながら表現をよりよくする活動ができるようになるだろう。

たとえば、アニメーションの主題歌を教材曲として活用することが考えられる。子どもたちが好きな歌には、テレビや映画のアニメーションの主題歌がある¹⁰⁾。その中には、仲間との絆を歌ったものや自分の夢や希望に向かって進もうと歌ったもの、自然のすばらしさを歌ったものなど内容としても教材曲として活用できるものがある。中にはリズムが複雑なものもあるが、好きな歌は何度も聴くことで歌うことができるようになる。しかも、そうなるのが早い。歌うことができるようになった上で読譜指導を行うことも可能であろう。

そのような教材曲の一つとして「さんぽ」がどちらの出版社の教科書にも掲載されている。ただ、教科書に掲載されるには問題点がある。テレビや映画で使われる曲は、子どもたちからの人気も高いがそれらの多くは一時の流行として忘れられることが少なくない。「さんぽ」のように一時の流行としてではなく、不動の人気を得た曲でなければ、数年間にわたって子どもたちが使う教科書への掲載は難しい。したがって、このような曲は教科書教材としてではなく、教師が教科書教材と差し替える教材曲として用いるのが妥当だろう。

今後、子どもたちが自分たちの思いや意図を表現するために自分や自分たちの思いや行為を振り返り音楽表現そして、道德的な思考力・判断力も高めていくことができるような教材曲や実践が増えていくことを期待する。

注

- 1) 山住正巳 1967『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、をはじめ多くの研究者が指摘している。
- 2) 日吉武 2010「音楽科教育における道德教育の研究—学習指導要領の検討を通して—」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』, 第62巻, pp. 57-69.
- 3) 木間英子 2008「日本音楽における音楽教育理論の美学的基盤の研究—情操教育としての音楽教育再考—」一橋大学大学院言語社会研究科博士論文, p. 155.
- 4) 文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社p. 12.
- 5) 文部科学省 「平成21年度 文部科学白書」, インターネット, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200901/1295623.htm (2011/10/28にアクセス)
- 6) 文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社, p. 70.
- 7) 文部省音楽取調掛編 明治14年(1881)『小學唱歌集』, 東京:文部省.
- 8) 外園康子 1970「明治時代における唱歌教材の性格—『小学唱歌集』『小学唱歌』—」『教育學雜誌』日本大学教育学会, 3-4, pp. 64-65.
- 9) 河口道朗 1991『音楽教育の理論と歴史』音楽之友社, pp. 80-81.
- 10) 2011年7月に熊本大学教育学部附属小学校の3年生と5年生に好きな曲のアンケート調査を行った。好きな曲を一人3曲無記名で書くようにした。その中でもアニメーションの主題歌は、3年生で23%, 5年生で14%であり、これはいずれの学年でもポップスに次いで2番目の割合であった。